

<見本>

博士論文要約

基礎看護技術の演習における教員の初学者へのはたらきかけ：

学生自身が“感じをつかむ”ことに焦点をあてて

Teaching Approaches to Nursing Students During the Early
Stages of Nursing Skills Acquisition in Laboratories
: Making Students Aware of Their Own Feelings

牧野美幸

Makino, Miyuki

I. 序論

看護学教育のあり方に関する検討会報告書（文部科学省，2004）の中で、「看護実践能力育成の充実に向けた大学卒業時の到達目標」が出され、看護実践能力の1つとして「看護援助技術を適切に実施する能力」が示されている。しかし、医療の現場は患者の権利意識の高まりから、学生が臨地実習で看護技術を実施する機会が限られている現実がある（間瀬，2012，p. 62）。このように制約や限界がある中で、学内における看護技術演習の授業は、看護実践能力を獲得する上で必須である。特に実技を学び始めて間もない学生の場合、自分の感覚に意識を向け、うまくいく感じをつかむことが重要である。そのような初学者である学生に対し、教員は初学者ならではのはたらきかけをしていると思われるが、具体的なはたらきかけについては明らかになっていない。

II. 目的

基礎看護技術の演習において、看護技術の実技を学び始めて間もない学生が、自らの感覚を通して“感じをつかむ”ことについて、教員は実際にどのようなはたらきかけをしているのかを明らかにする。そのことにより、看護技術教育の方法論的な示唆を得る。

III. 方法

研究デザインは、質的記述的研究であり、技術演習の参与観察と半構成的面接（インタビュー）を用いた。データ収集は、予備調査期間を含め2013年12月～2017年2月に行い、技術演習の場での教員の学生へのはたらきかけの場面の参与観察1回と、技術演習終了後、なるべく記憶の新しい時期に、インタビューを1回～3回行った。参与観察では、教員と学生とのやりとりや、教員の学生への直接的な指導場面を中心に行った。インタビューでは参与観察での教員のはたらきかけによって学生の行動に変化が生じた場面を中心に、教員のはたらきかけの意図や思い、はたらきかけたときの状況を確認した。また、教員のはたらきかけについて感じたことに焦点を当て、演習終了後のフォーマルインタビューの実施、もしくは演習中でのインフォーマルインタビューを実施した。分析は、フィールドノートおよびインタビューデータを1つのシートに整理したものを繰り返し読み、その中で、学生の動きや気持ちに反応がみられた場面の抽出から、その場면을再構成し、テーマ

を抽出した。なお、指導教員よりスーパーバイズを受けることにより、データ収集の方法や内容、分析方法の検討を行った。また、本研究は日本赤十字看護大学の研究倫理審査委員会の承認を得て実施した（承認番号：研倫審委第 2016-7）。

IV. 結果

本研究の教員の参加者は、5名の教員と12名の1年次の学生であった。5名の教員それぞれの教育経験および、基礎看護技術の指導経験は3年を超えていた。参与観察はいずれも各教員が担当した科目名「基礎看護技術」であり、その内容は生活行動の援助であった。インタビューは1回あたり60分程度で1回から3回実施した。氏名は全て仮名とした。

1. 教員自身がとらえている感覚をありのままに学生に表現する

教員は、自身がとらえている感覚をありのままに表現することで、学生がその感覚を感じられるように支援していた。例として、ベッド上端座位から車椅子に移動する援助を行う際に、患者役の学生の体は前傾してはいたが、学生の三田さんの肩に軽く顎を乗せているだけという感じであった。仁教員が「患者さんの体重をもらうように」と自分の身体感覚を伝え、三田さんはその表現を拠り所とし、「体重をもらう感じ」を自分の中に探り出そうとしていた。そして、三田さんは患者役の学生を大きく前傾させてその体重を自らの肩に乗せる構えをつくり、患者役の学生を持ち上げ、スムーズに車椅子に移動させていた。

2. 教員自身の身体の動きを見せて動きのイメージを伝える

教員は、自身の身体の動きを見せて動きのイメージを伝えることで、学生が教員の動きの感じをつかむように支援していた。例として、臥床患者のシーツ交換を行う際、学生の土井さんの入れた下シーツは、引っ張り上げると今にも抜けてしまいそうであった。久米教員は、下シーツを軽く持ち上げるだけでよいことを伝え、その場で母指と示指で下シーツを持つ構えをし、1度目は下シーツを持たず、2度目は持ってパントマイムを見せるかのように、すっと持ち上げる動作を見せた。すると土井さんは、久米教員の動きを意識して真似するように下シーツをすっと持ち上げ、マットレスに慎重に置くことができていた。

3. 教員がその場に同調しやすい雰囲気をつくり学生と感覚を共有する

教員は、学生がその場の動きのリズムやタイミングを作れるように学生と一緒にいる中で、自らの動きの感覚を学生が感じられる雰囲気を作り出していた。例として、点滴をしている臥床患者の和式寝衣を交換する際に、両本教員は学生の木村さんと一緒に、一つ一つの動作を声に出しながら行っていた。そのとき、両本教員が木村さんの目を見て自分と同じ動きをするように促すことにより、木村さんは教員の動きのリズムやタイミングに合わせる事が出来ていた。その結果、木村さんにあいまいさがなくなり、自信を持って寝衣交換を進めることができていた。

4. 学生が描くイメージと実際とのずれに気がつくように示す

教員は、動作を実際に行って見せることで、学生が自らの間違いに気づくように支援していた。例として、臥床患者を仰臥位から長座位、長座位から端座位にする際に、学生

の小川さんは自身の左腕の力で患者役の学生を起き上がらせるのと同時に、右手で患者役の学生の両足をベッドの下に降ろした。両本教員は小川さんのバランスの大きく崩れた動きをその場で行って見せた後、バランスを崩す原因となっている右手の動きを指摘し、右手の動きについて考えさせた。その結果、小川さんは、ベッドの背もたれをアップしてから右手を使って患者役の学生の両足をベッドから下ろし、ベッド上に端坐位にしていた。

5. 学生の身体に直接触れて適切な位置へと誘う

教員は、学生の身体に触れて適切な身体の位置に誘うことで、学生が身体で感じをつかむことを支援していた。例として、臥床患者を水平移動する際に、学生の山田さんは患者役の学生の腰部と大腿部の下に手を入れていたが、両腕と両手の手掌全体を使って保持していなかった。仁教員は、山田さんの両手に触れて引っ張り上げ、患者役の学生を支えるのに適切な位置まで持っていく、その感触をつかむように促した。すると、次の実施から山田さんは、適切な手の位置を手の感触で確かめながら水平移動を行っていた。また、両元教員は山田さんの手の位置が適切であったことが効果的な動きにつながったことを伝えていた。

6. 学生がイメージしやすい方法を用いて説明する

教員は、学生の身近な物を使って説明することで、学生がイメージできるように支援していた。例として、臥床患者のシーツ交換を行う際に、学生の江原さんが下シーツをマットレスの下に入れるのを見ていた馬場教員は、自らの左手を広げてファイルを置き、そのファイルをはずして手の指の広げ方を江原さんに見せた。つまり、普段は死角となって見えないマットレスの支え方を示した。すると、江原さんも馬場教員の手の指の広げ方を真似るように自分の左手を広げてみせた。そしてその後の実施で、江原さんはマットレスの下に左手を肘関節までしっかりと入れ、1本1本の指を広げてマットレスを支えていた。

V. 考察

1. 教員の身体感覚を学生と共有する意味

技術演習で、「体重をもらう」といった自身の身体に生じている感覚を、教員はありのままに学生に表現していた。この、「体重をもらう」のように、教授プロセスの中で「教える者」の身体に生じている感覚をありのままに表現することによって、「学ぶ者」にそれと同じ感覚を生じさせることを目的とした言語をわざ言語と呼ぶ（前川，2017，p.425）。教員がわざ言語を用いて自らの感覚をありのままに表現することで、初学者である学生は、教員の発したこの比喩的な言語を拠り所とし、自らの感覚に意識を向けていた。そして、「体重をもらう」という感覚を自分の中に探り出していくために、教員の表現に自らの感覚をなぞらえながら神経を研ぎ澄ませ、その場で自分はどうのような動きをすればよいのかを推論することに主体的に参加していた。この、学生が自身の積極的な推論によって得た感覚こそが、感じをつかんでいく道しるべとなり、やがて、わが身に生じる感覚を頼りに、他者へのかかわりを通して、学生自らが看護技術を編み出す感覚を感じ取っていくと考える。

2. 教員が自ら学生に歩み寄る

技術演習という短い時間の中で、教員は自ら学生に歩み寄り、学生がそのときその場で最も理解でき、実践につなげられる方法を判断し、学生にはたらきかけていた。Benner, Sutphen, Leonard, et al (2010/2011, pp.36-37) は、専門職実践の学習の中心的なものとして包括式徒弟式学習を挙げている。これは伝統的な学習方法における徒弟制モデルを指すのではなく、どのような専門職の場合にも必要とされる広範囲な統合的学習であるとし、その中には、教員が有能で熟練されたパフォーマンスの主な側面を具体的に例示し、明確に表現し、可視化することで、学生が目標に到達でき、自らの実践を振り返り、改善できるように支援することをも含んでいる。この統合的学習を効果的に行うためには、教員は学生が何を学んだか、学生に必要な支援は何か、学生の理解を促すためにどうするかを考え、学生個人の能力や経験等を理解することを常に意識し、それらを考慮したはたらきかけが必要である。

3. 看護技術の実技を学び始めて間もない初学者に対する看護技術教育への示唆

学生が教員の感覚を拠り所とし、自らに生じた身体感覚に気づくように促すはたらきかけを教員が行うことによって、初学者である学生は、自身で積極的な推論を行い、自らの感覚を使って感じをつかんでいくと考える。また、教員は、自らの身体感覚を表現することが、看護技術を学び始めて間もない学生が看護技術を身に付けていくための1つのツールになることを意識し、学生と相互に作用しあいながら、学生の中にどのように「学び」が生まれるのかを明らかにすることが重要である。そのため、看護技術教育における教員の学生へのはたらきかけの継続した検討を行っていくことが必要であると考えられる。

VI. 結論

教員が患者と関わる際に感じた身体感覚をありのままに教員自身の言葉で表現することにより、学生は自身に生じた感覚を教員の感覚に近づけて捉えていこうとする積極的な推論が行われていた。その積極的な推論を通して、学生は患者とかわる時の感じをつかんでいき、相手の状態に合わせた看護技術の実践を自らの感覚を通して学んでいた。

教員が自らの身体を使って学生の持つイメージと実際との違いを示すことで、初学者である学生は、自身で描いた動きのイメージの正確さと実際の動きのずれを認識することができていた。また、教員が自ら学生に歩み寄り、やりとりの中で学生個人の能力や経験、性格を理解することによって、学生がそのときその場で最も理解し、実践につながる方法を判断し、自身の指導に活かしていた。

看護技術演習における教員の学生へのはたらきかけから、教員の身体感覚を学生と共有する意味、学生のイメージを実践につなぐ、教員が自ら学生に歩み寄り、看護技術の実技を学び始めて間もない初学者に対する看護技術教育への示唆を考察した。これらを踏まえた上で、教員個々の実践に埋もれていた教員のはたらきかけの実態をさらに明らかにし、その意図や意味、工夫を浮き彫りにした上で看護技術を学び始めて間もない学生の育成を支援するための継続した検討を、今後も行っていく必要性が示唆された。